



総合情報学部准教授

まきのゆかり  
牧野 由香里

### 読み書き算も大事ですが

幼い頃からテストが苦手だった私は、模試で満点近い点をとる人たちをひそかに尊敬したものです。「世の中には頭のいい人がいるんだな。自分には逆立ちしてもしないよ」と。けれども、人生経験を重ねるにつれて、得点と賢さは必ずしも比例しないようだと気づいてきました。さらに能力と評価の研究を進めるにつれて、評価の尺度(ものさし)がいかにも不完全で、今なお開発途上にあることを知りました。

たとえば、近頃よく聞く「若者の言語能力が低下した」という指摘は正しいのかもしれませんが、だからといって若者の表現能力が低下したとは限りません。どうやら、言語能力や計算能力が乏しく見える学生ほど、映像や音楽など、イメージで感性を表現する能力が豊かなようです。

歴史的には確かに、言語と数字の能力以外は知性と見なされない

時代が長く続きました。生産性と効率が重視される産業主義社会では、これらの能力が重宝したからです。しかし、ポスト産業主義社会と呼ばれる現代では、従来とは異なる能力が求められています。コミュニケーション能力はその代表格ですが、この多元的な能力には、場の雰囲気や相手の表情を読み取るなど、イメージを感性で解釈する能力も含まれています。

もちろん、読み書き算が基本であることは今後も変わりませんが、二十一世紀を生きる私たちに、よりマルチな能力が必要ならば、評価の尺度もそれに対応させるべきではないのでしょうか。偏った「ものさし」で測られたら、誰だってやる気をなくします。私たちは学びの成果と課題を正當に評価されて初めて次のステップに挑戦する意欲を感じるのですから。そして、そうすることが評価する者の本来の務めだと考えています。